

原発事故被災者

相双の会

NO. 8

発行日

2012年12月21日

連絡先

國分富夫（会長代行）

住所

〒965-0013

会津若松市堤町6-12

電話 090 (2364) 3613

メール

kokubunpi-su@hotmail.co.jp

福島第一原発事故被災者原告団

第一次として地裁いわき支部に提訴



東電は炉心損傷や溶融等の重大事故を起こし全国に波及する未曾有の被害をもたらした。

福島県のみならず東北、関東地方の広域を放射能によって汚染し、広範な地域の住民の生命と健康の深刻な被害をもたらした。地域住民はふる里を追われ過酷な避難生活を余儀なくされた。あの寒空の中で逃げまわる中で命を落とす人、体育館等の避難に耐えられず命を奪われた方々、一年九ヶ月過ぎても先行きが見えない。生活再建への道筋ができていないために絶望と思ひ命を絶つ人、体調を崩す人、この責任を東電、国は取ろうとしない。原発は国策として進

めてきた自民党政権「安全神話」の下で利潤追求を最優先させた結果、何時か制御（コントロール）出来ない事故が起きると指摘されていたにも関わらず強行してきた。

私たちは海、山、川、先祖からの財産、そして家族までバラバラにされ全てを失った。生活再建は勿論のこと責任を取らせなければならぬ。

今後二次三次四次と提訴しなければならない。このことが若者、子供たちへの責任とします。

二次提訴の予定は二月又は三月上旬となるだろうと思います。

メッセージ

福島原発避難者訴訟提起にちなんで

私たちは永年にわたって原発の危険性を訴え、差し止め訴訟を戦ってきました。

3・11の東電福島第一原発の事故により、私たちの警告は現実のものとなってしまいました。

福島原発事故の被害は無限大と行っても過言ではありません。

しかし、東京電力はできるだけ損害賠償を少額で済ませようと策動しています。完全賠償を請求することで、その策動を打ち砕かなければなりません。そして、完全賠償は日本全体の脱原発につながります。完全賠償なしに脱原発はあり得ません。

謝れ、償え、なくせ原発。ともに連帯して戦いぬきましょう!!

脱原発弁護団全国連絡会

共同代表 河合弘之

同 海渡雄一

部なる津島地区に避難（後で分かった事ですが津島地区は放射能の線量が自分の住んでいた所よりも数倍も高い所）しました。当分は浪江には帰れないと言われた時ショックでした。

その後は親類、埼玉にいる娘の所と合わせて避難を6ヶ所を転々してようやく会津若松市にたどり着きました。二人の孫はまだ小さいので、夜になると二人一緒に泣いたりします。隣の方々に気を使い、ストレスがたまり私も妻も大変苦労しました。

一時帰宅も数回しましたが、家の中は当日のままであり、周りは背丈程の雑草が生え住宅街とは思えない状態です。

原発事故がなければ今頃は食堂の営業を再開していただろうと思うと悔しく涙が出てきます。

会津若松市には浪江町民が400名程避難している事から横のつながりを持ちたいと思い、今年4月19日に「会津地方なみえ会」を設立しました。町民の方々に声をかけ合い絆づくりに役立てて頂ければと思います。

間もなく二回目の冬を迎えますが雪の多いのには驚きますが、それだけ春の訪れは嬉しいです。

「東電から賠償金貰って生活できて良いな」等と言われる時があります。私たちはふる里を追われ、全ての財産と仕事を奪われ、家族までバラバラされ避難生活しているこの事実を分かって貰えないのが残念です。

私たちは浪江に帰って仕事をしながら普通の今まで通りの生活をしたいのです。この事だけは皆様に知ってもらいたいと思います。

原発はもうこりごりです。事故の恐ろしさ、放射能の恐ろしさを風化させないために後世に伝えて行く役目は私たちにあると思います。

浪江の町民が全員揃うのは何年先、何十年先になる事やら長いトンネル抜けるまで歩き続けよう。夢と希望を失いたくないから。

在 山形市 南相馬市 高橋 通さん

会報有り難うございました。



元の生活に戻りたい

在 会津若松市

浪江町 鈴木宏孝さん

忘れもしない3月11日の東日本大震災と原発事故と原発事故、私は食堂を経営しておりましたので昼の繁忙時間が過ぎ一息ついていた時に途轍もない地震が襲ってきた。家その物はどうか無事でしたが、店内はスープの入った寸胴鍋がひっくり返り、食器類全てがメチャメチャになってしまいました。次の朝片付けを始めようとした時、防災無線から流れてきたのは避難指示だ、すぐ帰れると思い、着の身着のまま避難しました。町の西方

また雪の季節がやって来ました。11/18 原町で「甲状腺」、11/22 山形市で「放射線」の説明会があり出席してきました。内容は「福島県で安全でない所はない。皆もとの所に住める。年間 100 ミシベルトどころか 200 ミシベルトまで平気だ」と言うしまつです。私も怒りがおさまらず反論しました。国、県、市、そして東電は原発事故を風化させ終わらせる方向に確実に入っています。背中を押されて帰還する人達が増えているように思います。私はこういう状況を納得しません。それぞれの場所で声を出し続ける必要を感じます。

Aさん

会報有り難う御座いました。
何時も会報を楽しみにしています。会報を読んで皆さん考えていることが同じだと思うと元気付けられます。お願いですから会報をずっと続けてください。資金を送ります。

Bさん

「相双の会」会報有り難う御座います。
二度目の雪の季節がやって来ちゃいました。雪の降らない浜通りからすれば大変厳しい季節ですね。またこの冬も閉じ籠もっているしかありません。もう限界です。

民事、軍事を問わない核廃絶へ向けて

相双の会の皆様へ

—————福島原発事故被災者の声を全世界に—————

平成24年12月9日 村田光平（元駐スイス大使）

日本人にとってはつらいことではありますが、福島事故により核エネルギーは人間社会に受け入れがたい惨禍を引き起こすものであることを思い知らされております。日本人は核エネルギーの持つ残虐性をすべて経験してきております。民事、軍事を問わない核廃絶の実現に貢献することが日本の歴史的な役割となりました。

しかし、まるで福島の事故がなかったかのように、日本でも海外でも原子力発電は推進され続けています。この期に及んで再稼働、原発輸出は不道德極まりないことです。福島を見捨てることは決して許されません。不幸にも犠牲になられた方、そして耐えがたい苦痛を受けている16万人を超える避難住民の立場から、私は真の核廃絶を世界に訴えております。そのために、原子力の恐るべき危険性を、敢えてありのままに明らかにしております。

原発は超巨大原爆であること、核兵器同様不道德であること、地震国、津波国の日本に54

基もの原発を生んだのは倫理と責任の欠如と腐敗であること、福島事故処理は今なお世界の究極の破局に発展しうる安全保障問題であること、先送りは許されず、国の責任の下での最大限の対応が求められることなどを指摘しております。去る9月20日には要請を受けて米議会の院内集會にビデオメッセージを寄せこの趣旨を伝えました。

福島第一原子力発電所の危機的な状況はできる限り広範囲な地球規模で人類の叡智を結集することを必要としております。また、4号機の崩壊に向かいつつある冷却プールに残っている1535本の燃料棒集合体を、できるだけ早く別の場所に移す必要があります。4号機に含まれるセシウム137の総量はチェルノブイリ原発事故の10倍であり、日本のみならず世界の究極の破局をもたらす可能性があります。今日、福島原発事故は世界の安全保障の問題であり最大限の対応を必要としますが、その様な対応は

残念ながら現在行われておりません。事故処理の国策化を緊急

日本中に広がっている危機感の欠如は放置できません。

去る12月2日には南相馬で年間1mSvを越す高線量コース（最高14倍）で若者・子どもを参加させるマラソン大会が内部被ばくの著名な専門家の反対を無視して強行されました。このたび国連人権理事会特別報告者アナンド・グローバー氏は原発事故にともなう住民対策において放射能の危険性についての認識不足が厳しく批判されていることを重く受け止めるべきです。

原発の本当の危険性に目覚めた国民は益々増えつつあります。日本ではもはや新たな再稼働はないと確信します。安全基準の策定を待たずに強行された大飯原発の再稼働は、いずれは世論によって停止に追い込まれる筈です。

原発事故ですべてを失った方々の怒りが日本

における反核運動を盛り上げ、海外にも広まっていくでしょう。日本がこうして真の核廃絶の実現に貢献することができれば、広島、長崎、そして福島の犠牲者の方々の苦しみは無駄ではなかったということになるでしょう。

原発事故の実態と核が生物と共存できないことを訴える「原発事故被災者相双の会」からの貴重な発信は「声なき声」とならないように巨大な拡声器で全世界に伝えることが切に望まれます。



2013年 正月がやってくる



仮設、借り上げで二回目の正月がやってきます。

息子、娘、孫達が帰省して楽しく賑やかだった正月を思い出す。

帰りには車のトランクには米、野菜などを満杯積んで行く、どこの家も同じ光景だ。

仮設、借り上げでは居場所が狭いために帰省できないのが現実だ。私たちは高望みをしているわけではありません。

これまでのようにささやかな楽しみと一家団らの生活を取り戻したいのです。